

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

■ 翻訳の未来

山岡洋一

ー 音を忘れた文章は

英語の世界でふつうに行われている口述筆記は、日本ではできる人がほとんどいない。その理由を考えると、現代日本語で話し言葉と書き言葉が乖離している事実に行きつく。

■ 翻訳とは何か—研究としての翻訳（その12）

河原清志

ー 字幕翻訳文化論

「斜め翻訳」に「弱い立場の翻訳」。斜陽の分野の翻訳のことかと思いきや、学生に大人気の「字幕翻訳」のことであるという。といっても、本稿は戸田が「字幕国日本」と称したぐらいわが国で大変人気のある映画の字幕翻訳を取り上げるのではなく、一般には見過ごされがちだが日常的に目にする「ニュースの字幕翻訳」を取り上げて、その文化的側面を多角的に論じる。

■ 東洋における翻訳者教育の伝統から（1）

北村彰秀

ー チベット

東洋における翻訳者教育を論じるシリーズの第1回として、古代チベットの仏典翻訳者の教育を取りあげる。

■ おすすめしたい韓国の本

福田知美

ー バカだからうまくいく12の法則

今回は7月初めに出版されたばかりの拙訳を紹介する。

翻訳通信 〒216-0005 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC012007@nifty.ne.jp
(アットは@に変えてください)

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

音を忘れた文章は

本や雑誌が売れないという話をよく聞く。ある意味で当たり前ではないかと思う。いま書店に行くと、コメンテーターとして、タレントとして、経営者として、スポーツ選手として、顔が売れている人の著書がたくさん平積みになっている。このなかでほんとうに本人が書いた本がどれだけあるのか、おおいに疑問だ。たいていは、「著者」が何時間か雑談をし、そのテープ起こしを読んで、ライターが文章を書く仕組みをとっているようなのだ。こうした方法で手軽に作られた本を買う理由が果たしてあるのだろうか。

以前にも指摘したが、本とは本来、生涯をかけて見つけ出した真実の知識を永久に書き残すために書かれたもの、可能なら岩に刻んで残しておくために書かれたものだとジョン・ラスキンが述べている。一字一字に命をかけて岩に刻んでいく。そのような姿勢と覚悟で書かれた本があるから、本という媒体には魅力があり、権威がある。この魅力と権威を利用したとんでも本が横行するようになっているのだから、本が売れないのも不思議ではない。

先月号でも取りあげた危機の指導者、ウィンストン・チャーチルは生涯に 40 以上の著書があるが、ごく初期を除いて、すべて口述筆記で書いたという。いまのお気軽な著者のはしりなのかと思うかもしれない。だが、そうではない。お気軽な著者が使うのは口述であって、チャーチルの使った口述筆記とは天と地の開きがある。口述の場合、文章を書くのは「著者」ではなくライターだ。「著者」はアイデアを提供するだけだ（アイデアすら編集者が考える場合もあるようだが）。これに対して口述筆記では、著者が文章のすべてを綴っていく。つまり、本人が文章を一語一語、頭のなかで組み立ててしゃべったものを、タイピストがそのままタイプする。ライターは関与しない。チャーチルは自分でタイプする手間を省いただけであって、文章を書く作業を他人に任せただけではない。

口述筆記という方法はアメリカやイギリスでは比較的よく使われているようで、多忙な経営者や政治家がこの方法で文書を書くのはごく当たり前の光景のようだ。

それに似た事実をあげておこなら、オバマ大統領やクリントン大統領が即席で話した内容は、何の変更も加えることなく、そのままインターネット・サイトに掲載されており、修正が必要になることはまずないという（子ブッシュ大統領の発言はそうはいかず、何度も修正が必要になったといわれている）。

日本の場合にどうだろう。口述筆記でまともな文章が書ける人はいないわけではないが、ごく少ないのではないだろうか。また、講演や講義のテープを起こしたとき、そのままですっきりした文章になっている例はめったにないのではないだろうか。国会での演説のように原稿がある場合には、そのまま文章になっているわけだが、言葉に生気がなく、聞くに堪えないのが普通だ。チャーチルやオバマ大統領は言葉で国民を動かす名演説で有名だが、日本にはそういう政治家はまずいない。

英米と日本でこのような違いがあるのはなぜだろうか。違いがあるのが政治家だけなら、日本の政治家は質が低いからだと簡単に片づけることもできるだろうが、事実をみていけば、そうはいえないことが分かる。違いは政治家だけでなく、はるかに広範囲な層にみられる。したがってもっと深く根源的な要因があるはずだ。

ではどういう要因があるのか。結論を先に述べるなら、現代の日本語がこのような違いをもたらす要因になっていると思える。いまわれわれが使っている日本語は、話し言葉と書き言葉が大きく乖離していて、話し言葉で話された言葉はそのままでは文章にならず、書き言葉で書かれた文章はそのままでは話せないようになっているのである。このため、日本語では口述筆記が容易ではなく、演説や講演はみっともない棒読みになるか、そうでなければ、文章としては体を成さないものになる。

これに対して英語で口述筆記が容易であり、力強い演説や講演がそのまま見事な文章になることが少なくないのは、話し言葉と書き言葉が乖離していないからと思える。ただし、英語の場合には、別の形の乖離がある。一方には非公式の言葉があり、ほ

ば話し言葉専用である。他方に公式の言葉があつて、話し言葉にも書き言葉にもなる。公式の言葉をしっかり学んで身につけている人（上述の例ではクリントン大統領やオバマ大統領）なら、口述筆記は容易だし、即席の発言はそのまましっかりした文章になっている。公式の言葉が身につけていない場合には、そうはいかないのだろう。

現代日本語で話し言葉と書き言葉が乖離していることは論証も例証も必要のないほど明らかな事実だが、少し考えてみると、まったく奇妙なことだ。なぜかという、現代の日本語は明治期の言文一致運動によって成立し、戦後の国語改革で完成した口語文だとされているからである。言文一致の口語文だというのは、話し言葉と書き言葉が大きく乖離しているはずがないではないか。

だがじつのところ、言文一致と国語改革とは何だったのか、理解しにくい面がある。言文一致、口語文というからには、それ以前のいわゆる文語文が言文不一致だったと主張しているわけだが、はたしてそうだったのか、疑問だからだ。いわゆる文語文には、文字通りの言文一致の文章として使われてきた長い歴史がある。その点は、たとえば、以下の文章を読んでみれば理解できるのではないだろうか。

祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰のことはりをあらはす。おごれる人も久しからず。只春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。
（『平家物語』）

なんでまた、「平家物語」なんぞをもちだすのかと思われるかもしれないが、本来の意味での言文一致の文章のなかで、個人的にいちばん好きなものだからだ（古すぎるといふのであれば、江戸時代の浄瑠璃をあげてもいいのだが）。鎌倉時代の初期、13世前半の作品だといわれており、琵琶法師の語りで広まった。文章と語りのどちらが先だったのかは分からないが、文章が先だったとしても語りのために書かれたことは確かだ。だから、文字通りの言文一致なのである。いうまでもないことだが、語りというからには、琵琶法師も聞き手も文字を使わない。琵琶法師は長い長い『平家物語』の全文を覚えていたのであり、聞き手は語りだけから意味を理解したのである。心地よいリズムで記憶しやすく、聞きやすい文章になっているのは、そのためだ。

つぎに、言文一致運動の直前、明治初期の例をみ

てみよう。
「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らず」と言えり。されば天より人を生ずるには、万人は万人みな同じ位にして、生まれながら貴賤（きせん）上下の差別なく、万物の霊たる身と心との働きをもって天地の間にあるよろずの物を資（と）り、もって衣食住の用を達し、自由自在、互いに人の妨げをなさずしておのおの安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。されども今、広くこの人間世界を見渡すに、かしこき人あり、おろかなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥（どろ）との相違あるに似たるはなんぞや。（福沢諭吉『学問のすすめ』）¹

明治5年に出版されて大ベストセラーになった本なので、語りや演説のための文章でないことは確かだ。それにいわゆる文語体で書かれている。言文一致とは対極にある文章だと思えるかもしれない。だが、この文章を読んでみると、黙読するのではなく、音読してみると、『平家物語』に似て、心地よいリズムで記憶しやすく、理解しやすいことに気づくのではないだろうか。

ある意味で、これは当然である。明治初期には、というより戦後初期までは、読書にあたっては第1に黙読ではなく、音読が常識であり、第2に、読んだ本は暗唱できるようにするのが常識であった。だから、『広辞苑』が「文語」について、「もっぱら読み書きに用いられる言葉」としているのは正確ではない（ちなみに『新明解』では「表現される言語の中で、現代口語ではすでに一般的ではなくなった文体・文法体系に属する表現」と定義している。さすがだと思う）。文語文も、音読し、語るために用いられていた。文語文は音を伴っていたのであり、言文不一致ではなかったのだ。

別の例をあげてみよう。翻訳にあたって、原文に

¹ 福沢諭吉は冒頭部分のもとになったとみられる「アメリカ独立宣言」を幕末の慶應2年にこう訳している。

天ノ人ヲ生ス(ず)ルハ億兆(おくちょう)皆同一轍(どういつてつ)ニテ之ニ附與スルニ動カス可(ベ)カラサ(ざ)ルノ通義(つうぎ)ヲ以(もつ)テス即(す)なわチ其通義トハ人ノ自(みず)カラ生命ヲ保チ自由ヲ求メ幸福ヲ祈ルノ類(たぐい)ニテ他ヨリ之ヲ如何トモス可(ラ)サ(ざ)ルモノナリ

両者を比較すると『学問のすすめ』では、いわゆる口語文にかなり近づいていることが分かる。

聖書の言葉が引用されていることが少なくない。だから、聖書はすぐ手に届くところに置いてある。当初は『口語訳聖書』を使い、つぎに『新共同訳聖書』を使ったが、どうしても違和感が抜けなかった。たとえば、『新共同訳聖書』では「マタイ福音書」の5:3~10、「山上の説教」はこうなっている。

心の貧しい人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。
悲しんでいる人々は、幸いである、
その人たちは慰められる。
柔和な人々は、幸いである、
その人たちは地を受けつぐ。
義に飢えかわいている人々は、幸いである、
その人たちは満たされる。
あわれみ深い人々は、幸いである、
その人たちは憐れみを受ける。
心の清い人々は、幸いである、
その人たちは神を見る。
平和をつくり出す人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。
義のために迫害されてきた人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。

断言するが、キリストがこう語ったのだというのであれば、それから2000年以上にわたって、欧米社会に大きな影響を与えつづけるなどということはありえない。こんな弱々しい言葉から三大宗教のひとつが生まれることなどありえない。こういう違和感や、何度か追悼ミサに出席するなかで、ますます強まっていった。聖書は黙読するために書かれたのではない。ミサで、家庭で、朗読するために書かれている。その言葉をミサで耳にすると、弱々しく女々しく、耐えがたいほどなのだ。

そこでいつしか、『文語訳聖書』を使うようになった。同じ部分がこう訳されている（なお、文語訳の時代には「山上の説教」ではなく、「山上の垂訓」というのが普通だった）。

幸福（さいわい）なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん。幸福なるかな、義に飢ゑ渴く者。その人は飽くことを得ん。幸福なるかな、憐憫（あはれみ）ある者。その人は憐憫を得ん。幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん。幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱（とな）へられん。幸福なるかな、義のために責められたる者。天國はその人のものなり。

これなら、ミサで朗読されたのを聞いたとして、

おそらくそれほど違和感をもたないはずだ。口語訳である『新共同訳聖書』よりも、『文語訳聖書』の方が、話し言葉としてはるかに優れているのである。

要するに、いわゆる文語文はかならずしも言文不一致であったわけではない。言文一致という理念に基づいて作られた口語文によって、そしておそらくは戦後の国語改革によって、日本語の言と文は大きく乖離する結果になったのである。言文一致ではなく、言文不一致になったのだ。

そのうえ戦後になって、音読は劣ったものというイデオロギーが登場し、黙読が強制されるようになった。それとともに、名文を暗唱する習慣がなくなった。このため、いわゆる口語文は音との関係を失っていった。リズムのない文章、記憶するには適さない文章、朗読を聞いただけでは理解が難しい文章、力のない弱々しい文章、明快さや論理性のない文章、こういう文章が幅を利かせるようになった一因は、音を忘れて話し言葉との接点を失ったことにある。

翻訳という観点にたつなら、原文の意味を伝えるのは当然だが、それに止まらず、原文の美しさ、リズム、力強さ、明快さ、晦渋、論理性なども再現したい。そのためには、戦後教育の申し子として、音と切り離された文章に慣れ親しんできたことを反省し、本来の意味での言文一致を目指したいと考えている。

少なくともフィクションの世界にはそういう翻訳がある。たとえば最近、『不思議の国のアリス』の10種類の既訳を比較検討する機会があったが、そのなかで、矢川澄子訳が読み聞かせ用の文章として抜群であることをあらためて確認できた。冒頭部分を引用しておこう。

アリスはそのとき土手の上で、姉さんのそばにすわっていたけれど、何にもすることはなし、たいくつでたまらなくなってきたね。姉さんの読んでる本を一、二度のぞいてみたけれど、挿絵もなければせりふもでてこない。「挿絵もせりふもない本なんて、どこがいいんだろう」と思ってさ。だったら、どうしようかな。ヒナギクの花環でもつくったらおもしろそうだけれど、わざわざ立ちあがって摘みにゆくのもおっくうだし、なにしろこの暑さではねむくて頭がぼうっとしていて、これだけ考えるのもやっとこさでね。と、そのときなんだ、ふいにピンクの目をした白ウサギが一

びき、すぐそばを通りすぎていった。²

20代のお兄さんが小学生の女の子に物語を聞かせている。そういう場面が、そのときの声が美しい日本語で再現されている。このときに比較した10種類の既訳では、矢川澄子にかぎらず、大正から昭和初期に生まれた訳者の方が、戦後も高度経済成長期に生まれた訳者よりも、優れた訳が多いように感じた。新しい訳ほど優れていなければおかしいのだが、実際にはそうならないようなのだ。

もうひとつ例をあげよう。スティーブン・キング著 芝山幹郎訳『ニードフル・シングズ』（文藝春秋社）の冒頭部分だ。

あんた、初めてじゃないね

そうさ、初めてじゃないよ。まちがいない。前にもここへきたことがあるだろ。その顔、ちゃんとおぼえているぜ。

こっちへきな。握手ぐらいさせてくれよ。話があるんだ。あんたのこと、顔が見える前から気がついてた。歩き方でわかったのさ。でも、いい時季を選んだね。キヤッスルロックへ帰ってくるには申し分のない日じゃないか。な、最高だろ？
.....³

これも、原文の意味だけではなく、雰囲気やリズムまでも忠実に再現した名訳である。たった数行読んだだけで、キングの異様な物語の世界に引き込まれるはずだ。その秘訣は、原文の声を再現して、文字通りの言文一致を実現していることにある。このような名訳があるのだから、口語文も棄てたもので

² Alice was beginning to get very tired of sitting by her sister on the bank, and of having nothing to do: once or twice she had peeped into the book her sister was reading, but it had no pictures or conversations in it, 'and what is the use of a book,' thought Alice 'without pictures or conversation?'

So she was considering in her own mind (as well as she could, for the hot day made her feel very sleepy and stupid), whether the pleasure of making a daisy-chain would be worth the trouble of getting up and picking the daisies, when suddenly a White Rabbit with pink eyes ran close by her. (Lewis Carroll, Alice's Adventures in Wonderland)

³ YOU'VE BEEN HERE BEFORE

Sure you have. Sure. I never forget a face.

Come on over here, let me shake your hand! Tell you somethin: I recognized you by the way you walk even before I saw your face good. You couldn't have picked a better day to come back to Castle Rock. Ain't she a corker?(Stephen King, Needful Things, Signet Books)

はない。

以上をまとめておこう。言文一致運動と国語改革のために、いまの日本語は話し言葉と書き言葉が大きく乖離している。文章を朗読すれば聞くに堪えない棒読みになるのが普通だし、講演や演説を文字にすれば、読むに耐えない文章になる。そのためだろうが、話し言葉も書き言葉も力を失い、美しさを失い、論理性を失っている。

これに対して、いわゆる文語文は、文章の力、美しさ、論理性といった点ではるかに優れていたように思える。ある意味でこれは当然なのだ。文語文が書かれていた時代には、文章は音読するものであり、暗唱するものであった。暗唱してもらえるようにするのが書き手の目標だったのである。いまの書籍は書店の棚という限られた資源（あるいはインターネットでの注目という限られた資源）をめぐる激しい競争を繰り広げているのだが、いわゆる文語文の時代には、人びとの記憶力というはるかに限られた資源をめぐる競争していたのである。だから、文章の美しさやリズムなどの点で、はるかに優れた文章が書かれていたのは不思議だとはいえない。

話し言葉と書き言葉が結び付いていた点で、文語文が優れていたといっても、新字新仮名の戦後教育を受けたものには文語文を書くのは容易ではない。それに、苦勞して書いても、読者に受け入れられるとは考えにくい。だから、いわゆる口語文を鍛えていくしか方法はないのだと思う。矢川澄子や芝山幹郎の訳を読むと、論理を扱う分野でも新しい文体を買い外すべきであり、開発できるはずだと思う。たとえば、幕末期を代表する儒者であり、明治初期の大翻訳家でもある中村正直の訳文を読むと、儒教で鍛えられた論理性が心地よい。これを口語文に活かす方法はないだろうか。これが今後の課題だと考えているが、日暮れて途通しの感がなくもない。

買ka うu 力chikara = 変ka えe るru 力chikara

公式ツイッター @SpendShift_jp

スPEND・シフト

〈希望〉をもたらす消費

フィリップ・コトラー 序文 ジョン・ガースマ&マイケル・ダントニオ 著 有賀裕子 訳
定価1890円(税込)



フィリップ・
コトラー氏
絶賛!!!



「嫌」消費? いいえ、「賢」消費です。

字幕翻訳文化論

「斜め翻訳」に「弱い立場の翻訳」。斜陽の分野の翻訳のことかと思いきや、学生に大人気の「字幕翻訳」のことであるという（マンデイ 2009, pp. 300-312）。といっても、本稿は戸田（1997）が「字幕国日本」と称したぐらいわが国で大変人気のある映画の字幕翻訳を取り上げるのではなく、一般には見過ごされがちだが、日常的に目にする「ニュースの字幕翻訳」を取り上げて、その文化的側面を多角的に論じる。

翻訳とは何か—字幕翻訳

斜め翻訳 (diagonal translation) ということばがある (Gottlieb 1994)。文字対文字の言語間翻訳が「水平転移 (horizontal transfer)」であるのに対し、映像翻訳 (film translation) ないし「視聴覚言語転移 (audiovisual language transfer)」は、音声からテキスト (文字) に移されるため、斜めに矢印が向くからだという。(ちなみに、通訳は音声対音声なので、水平転移。) そして、起点テキストの音声トラックと目標テキストの字幕が共に存在するため、字幕翻訳は「弱い立場の翻訳 (vulnerable translation)」だという。これは、字幕は時間やスペースの制約を尊重しなければならないだけでなく、オリジナル言語を多少でも知っている視聴者の厳しい目に晒されているからであるという (Díaz Cintas & Remael 2007, p. 57)。

一般にこのような特徴を持つ字幕翻訳は、「原文はこうだ」という原文至上主義の立場から批判にさらされやすいという (戸田 1997, p. 116)。そのため、『映画字幕は翻訳ではない』というタイトルで、清水・戸田・上野 (1992) は、字幕翻訳は「観客にわかる字幕をつくることで、原文を正確に翻訳することではない」という (p. 72)。

この点、藤濤 (2007) は、字幕版と吹き替え版を比較し、字幕版では「字数制限内で収まるなど他の条件が満たされれば、なるべく ST^{註1}に近い訳語が選択され、吹き替え版では ST の表現に束縛されず自由な意識がなされる傾向を示すのではないかと予測される」との仮説を打ち出し、(1) 分量 (文字数) では、明らかに字幕版は字数制限という制約が翻訳に影響を与え、(2) 意味情報では、字数制限のある字幕では、情報量が必然的に縮小されることになるものの、それが冗長性の縮小であれば取捨選択はかなり成功していると言え、(3) 文体情報については、字幕翻訳の文体は「平板化」し、書き言葉の

規範に合わせることが求められ、(4) パラ言語的要素については吹き替え版ほどではないにしても、文化の差異や嗜好の違いを極めて同化的に処理して介入が入る余地がある、という (pp. 123-130)。

また、日本の先駆的な映画の字幕翻訳について、長沼が『日本の翻訳論』のアンソロジーの1つに収録しているものが目を引く。

太田龍男「スーパー・イムポーズにおける日本語の貧困」からの長沼による引用 (長沼 2010, p. 300。但し、下線部は筆者による)。

- ・理解といふやうな、知的のものでなく、気もちの上でピッタリくる、同じ空気の中のものとして、外国映画を日本の大衆の心の内へ、しみとほらせてゆかねばならないのです。
- ・スーパー・イムポーズは、外国語からつかはされた使者たることをやめて、日本語からの出迎えの使者とならねばならないのであります。いひかへれば、外国語の翻訳ではなくて、外国語の表現しようとするところを日本語で語り出すのでなければなりません。

長沼によると、太田は昭和初期の日本における字幕翻訳に関し、異化翻訳 (foreignization) を批判した (つまり同化^{註2}; domestication を支持した) という。但し、太田が批判したのはいわゆる「できのわるい字幕」であって、実践的な実務家の視点から異化翻訳自体を批判したのではないと長沼は解釈している (長沼 *ibid.*, p. 302)。いずれにしても、上記引用の下線部のごとく、同化方略を推奨する文言は、藤濤 (2007) の言う「文化の差異や嗜好の違いを極めて同化的に処理して介入が入る余地がある」ことに呼応すると思われ、昭和初期から平成期に及ぶ、字幕翻訳の大きな傾向だと思われる。

この「介入」というのは、翻訳学が社会的・文化的・イデオロギ的転回を見せた (とされる) 諸学説 (Bassnett & Lefevere 1990; Cronin 2003; Snell-Hornby 2006; Pym, Shlesinger & Jettmarová 2006 など) のひとつの大きな帰結を示す鍵概念だと筆者は考えている (Munday 2007; 河原 2010b)。

いずれにしてもこれらの議論は、「映画」の字幕翻訳を想定したものであり、「文化論」が大いに展開されるものと思われるが、本稿では「映画」に比べると「文化論」が浮上しにくい (かもしれない) 「ニュース」の字幕翻訳を扱うことにより、逆に字

幕翻訳のもつ「文化性」に焦点を当てて包括的に議論してみたい。

翻訳とは何か—ニュースの字幕翻訳

テレビニュースの字幕でよく目にするのは、NHKであれば定時のニュースで外国人が発言した箇所（いわゆるサウンドバイトの部分）に字幕を入れたものである^{註3}。東京 MXTV 局では、18 時から定時ニュースで姉妹局 NY 1 のニュースを放映する際に、字幕を付している。その他、ケーブルテレビ各局ではニュースに限定しなければ数多くの字幕翻訳が利用されている。ニュース番組であれば、「デモクラシー・ナウ」が朝日ニュースターで放映されており、これにはすべて字幕が付されている。このように、地上波で日常的に視聴者が目にするニュース番組に字幕が付される場合は少ないものの、今後、さらなるメディアのマルチ化が進み、多様な需要に応えるためにニュース番組における字幕翻訳の利用が増えることもありうる。このようなメディア状況のなか、ニュース字幕の翻訳においていわゆる「文化的なるもの」がどのように扱われているのか、字幕翻訳自体、ひとつの文化を構成し、その文化を構成する営為が起点文化と目標文化を、目標文化の側からさらに構成する、という些か厄介な論調で論を展開してみたい（但し、本稿では文化人類学における本質主義、反本質主義＝構築主義、反反本質主義＝戦略的本質主義などの議論には立ち入らない^{註4}）。

訳出ストラテジー—一般の先行研究

ニュース翻訳の文化的側面について、まずは「訳出ストラテジー」、つまりどのように翻訳者が訳出行為を行っているかに関する考察から始めてみたい。これまで翻訳学分野において、訳出ストラテジーの研究は盛んに行われてきた。その一例を示すと、以下ようになる。

Vinay & Darbelnet (1958/1995) 7つの手続き、方法 —直接的翻訳：①借用 ②語義借用③直訳 —間接的翻訳：④転位 ⑤調整 ⑥等価 ⑦翻案
Nida (1964) 5つの調整技術 ①追加 ②代替 ③変更 ④脚注 ⑤言語から経験への調整
Catford (1965) 翻訳シフト —レベルのシフト（文法から語彙へのシフト） —カテゴリーのシフト ①構造的シフト ②クラスのシフト ③ユニットのシフト ④体系内シフト
Newmark (1988)

- 8つの方法（テキスト全体に關係）
①語対応訳 ②直訳 ③忠実訳 ④意味訳 ⑤翻案 ⑥意訳 ⑦慣用語法に則した訳 ⑧コミュニケーション重視訳
- 15の手続（センテンスおよびそれ以下の単位）
①転移 ②文化的等価 ③記述的等価 ④同義語 ⑤語義借用ないしなぞり ⑥調整 ⑦補償⑧クプレ ⑨同化 ⑩機能的等価 ⑪成分分析 ⑫シフトまたは転位 ⑬広く認められた訳語 ⑭言い換え ⑮註、註解

Chesterman (1997)

- 10の統語的ストラテジー
①直訳 ②語義借用、なぞり ③転位 ④ユニットのシフト ⑤句構造の変更 ⑥節構造の変更 ⑦センテンス構造の変更 ⑧結束性の変更 ⑨レベルのシフト ⑩レトリックスキーマの変更
- 10の意味論的ストラテジー
①同義語 ②反意語 ③上位語 ④反転 ⑤抽象化の変更 ⑥強調 ⑦拡張、圧縮 ⑧言い換え ⑨比喩の変更 ⑩他の意味論的変更
- 10の語用論的ストラテジー
①文化フィルター ②追加、削除 ③明示化、暗示化 ④対人的変更 ⑤言語行為の変更 ⑥一貫性の変更 ⑦部分的翻訳 ⑧可視化の変更（註、註解など） ⑨翻訳編集 ⑩他の語用論的変更

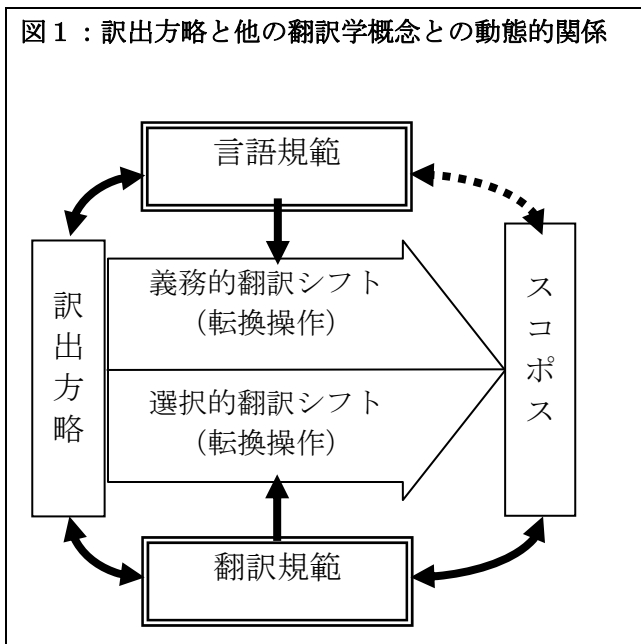
以上、翻訳は稲生・河原（2010）による。

以上を概括すると、これらは翻訳結果を静的に捉え、原文と訳出物との差である翻訳シフト（Catford 1965）を緻密に検証し、それぞれの基準で分類している分類学（taxonomy）である。これらは翻訳者が翻訳実践行為において実際に活用すべき「ストラテジー」として提唱されたもので、上記のように諸説あり、いずれも説明力があるが、筆者は、これらの詳細な分類はストラテジー（戦略ないし方略）よりも下位の分類項目であるタクティクス（戦術ないし技法）という位置づけにさしあたりしておき、翻訳の大きな方策を担うべきものをストラテジーと位置づけた上で、異なった体系化を試みてみたい。

「ストラテジー（戦略）」とは、『広辞苑』によると、「戦術より広範な作戦計画。各種の戦闘を総合し、戦争を前局的に運用する方法」であり、また *Longman Dictionary of Contemporary English* によると、“strategy”とは“a well-planned action or series of actions for achieving an aim / skillful planning in general”とあるように、一定の目標を達成するための計画的な方策のことである。したがって、上記の先行研究を参考

にしつつ、動的な翻訳モデルに位置づけて「訳出ストラテジー（方略）」を案出する必要があると言える。かかる問題意識を基に、翻訳の動態モデルを示すと、以下の図1のようになる。

図1：訳出方略と他の翻訳学概念との動態的關係



この翻訳動態モデルを支える操作定義としては、以下が挙げられる。

- ①訳出ストラテジー：一定の目標を達成するための計画的な方策（本稿による定義）
- ②翻訳規範：あるコミュニティが共有する一般的価値ないし考え方を、特定の状況にふさわしく、適用可能な作業指示に翻訳したもの（Toury 1995）
- ③スコpos：翻訳というコミュニケーション行為の目的（Reiß & Vermeer 1984/1991）
- ④翻訳シフト：起点言語と目標言語の構造上の差による、起点テキストと目標テキストの言語上のズレ（Catford 1965）。これに関連して「転換操作」とは、翻訳シフトを実現するためのさまざまな操作のことで、言語構造上、義務的にシフトさせる必要がある義務的なものと、目標言語らしさを獲得するためにおこなう選択的なものがある（Vinay & Darbelnet 1958/1995; 河原 2009, 2010a^{註5}）

翻訳動態モデルとしては、様々な翻訳規範（初期規範、予備的規範、運用規範）に統御されつつ、当該原文の目標言語における訳出の目的（スコpos）が決められ、そのスコposによりさらに翻訳規範も制約を受ける。それを受けて今度は、当該スコpos

という目標達成のために翻訳の前段階で、ある程度の訳出方略が練られ、それを土台にして具体的な翻訳実践プロセスの中で翻訳シフトを実現するために諸々の転換操作が行われる、という流れである。

以上のことより、「訳出ストラテジー」は個別具体的な翻訳行為のスコposやテキストタイプに応じた大まかな訳出方略であり、一定の目標達成のために翻訳者が意識的に有しているものであり、訳出の指針となる大まかな方策であると言えよう。

字幕翻訳における訳出ストラテジーの先行研究

前節では、訳出ストラテジーの一般論について、先行研究を分析したが、ここでは「字幕翻訳」における訳出ストラテジーについて考察を進めたい。

字幕翻訳の先行研究としては、例えば字幕の制約について Hatim & Mason (1997) は、

- (1) 音声言語から書記言語への変換に伴う制約
- (2) 表現媒体・チャネルによる制約
- (3) (2)の結果、オリジナルと比べ圧縮された内容になるという制約
- (4) 映像との整合性（映像情報と字幕情報という異種記号間の結束性）確保という制約

があるとしている。これは凡そ、映像メディア上に字幕をつけるというメディア上の制約であり、字幕翻訳の強力な規範として具体的な翻訳行為を統制することになる。そのことに鑑みて分析をおこなった字幕翻訳のストラテジーとして Gottlieb (1992) が掲げる、

- 拡張・言い換え・転移・模倣・複写・変換・圧縮・簡素化・削除・放棄

という 10 の訳出ストラテジーは、事後的に静的な分析を行った分類学の結果として説明力のあるものである。が、本稿では次節で具体的な事例の分析を通して、4つの訳出ストラテジーを設けたうえで、そのストラテジーを採用する背後にある理由・動機を3つの側面から分析し、訳出ストラテジーを別の観点から考察してみたい。

事例分析の視点と手順

ニュース字幕翻訳の分析の手順は以下が考えられる（具体例は、稲生・河原 2010 参照）。まず、英語原文と日本語字幕翻訳を訳出単位ごとにパラレルに並べ、命題（ないし項）がそのまま保持されている部分を同定する（命題保持訳^{註6}）。次に、原文に

あり翻訳にない箇所を同定する（削除）。そして、原文が何らかの形で別の日本語表現に言い換えられている箇所を同定する（言い換え）。さらに、原文にはなく、翻訳文にのみ現われている補足的な表現を同定する（補足）。これらの作業を行うと、英語原文と日本語字幕翻訳との対応関係がすべて抽出できるので、実際の翻訳者もこの4つの転換操作を意識して行っているものと思われる。したがって、

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ①命題保持訳 ②削除 ③言い換え ④補足 |
|---|

という4つの転換操作を以ってニュース字幕翻訳における「訳出ストラテジー」と筆者は考える（なお、この4つのストラテジーを案出する際、染谷泰正先生から多大なアドバイスを頂いた）。

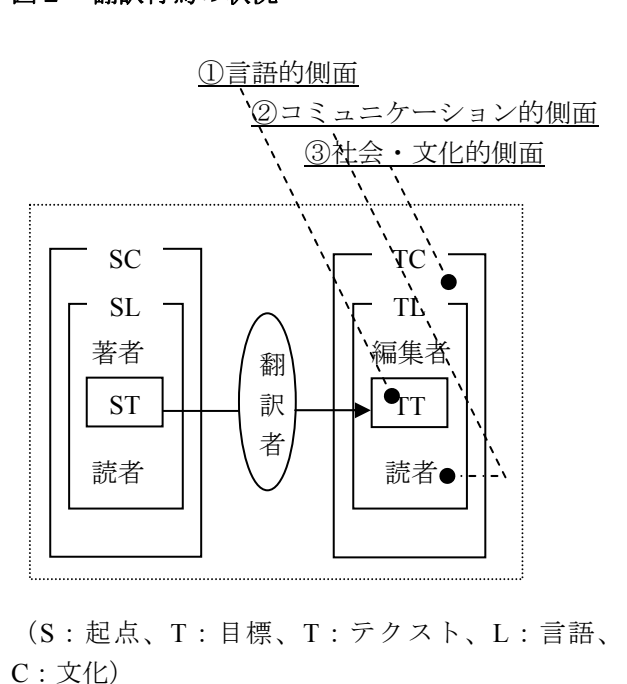
次に、Baker (1992/2011)が提唱する5つの等価の枠組みを利用して、翻訳シフトを分析する。その際、5つのレベルにおいて、上記4つのストラテジーが採用されることでどのような翻訳シフトが見られるかについて分析する。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> • equivalence at word level (語レベル) • equivalence above word level (フレーズレベル) • grammatical equivalence (文法レベル) • textual equivalence: (テキストレベル) -thematic and information structure (主題進行) -cohesion (結束性) • pragmatic equivalence (語用論レベル) |
|--|

更に、4つのストラテジーを採用する背後にある理由ないし動機を検証する。そもそも、翻訳を行うコミュニケーション状況は図2で示される通りであって、①翻訳者が起点テキストを目標テキストに転換操作する言語的側面、②当該コミュニケーション状況において翻訳行為の結果、翻訳者が原文の意を翻訳読者に効果的に伝えるというコミュニケーション的側面、③翻訳読者が置かれる社会・文化的状況に配慮した翻訳コミュニケーションを行うという社会・文化的側面、の3側面が考えられる。

このようにして、翻訳ストラテジーの背後にある3つの側面を同定し、なぜそのような翻訳ストラテジーを翻訳者が選択したのかについて分析することで、翻訳ストラテジーの使用の実態が詳らかになるものと思われる。

図2 翻訳行為の状況



これを基にして、(1) 英語原文テキストと日本語字幕翻訳テキストをセンテンス単位で平行に並べ、すべての対応箇所に関して訳出方略として「命題保持訳」「削除」「言い換え」「補足」を同定する。つぎに、(2) これら4つの訳出方略の背後にある理由・動機について同定する。語レベル、フレーズレベル、文法レベル、テキストレベル（主題進行、結束性）、語用論レベルの5つについて、①言語的側面、②コミュニケーション的側面、③社会・文化的側面の3つを個別具体的に検討する。

以上が、ニュース字幕翻訳のテキスト分析のひとつの手法である。

ニュース翻訳の訳出ストラテジーと翻訳学的特徴

具体的な分析データと事例に即した分析結果の詳細は本稿では取り上げないが、筆者がかつて共同で行った研究分析を通して明らかになったニュース字幕翻訳の4つの訳出ストラテジーの持つ3つの側面の理由・動機について記すと以下ようになる。

①言語的側面においては、英日語の言語構造の相違から来る言語類型論上の翻訳シフトの処理がなされていること、及び、字幕翻訳に限らず翻訳行為一般に共通した訳出ストラテジーとして4つのストラテジーが採られていることがわかった。

②コミュニケーション的側面においては、まず、字幕メディアの諸々の制約による字数制限という大きな縛りが理由で、削除・言い換えによる情報の圧縮が一般的に見られた。また、マイクロ・コミュニケーションよりもマクロ・コミュニケーション^{註7}を重

視するために4つのストラテジーが採用されたり、あるいは、両者を視聴者にとって峻別できるように敬体・常体の使い分けを行うなどの処理が見られた。さらに原文の冗長さを圧縮することによって、情報が効率的に伝わる工夫をするためにストラテジーを上手く使用しているものも見られた。

③社会・文化的側面においては、起点文化（アメリカ）と目標文化（日本）の社会・文化的情報ギャップを埋めるための処理がなされていた。主に、日本人視聴者にとってあまり情報価値のないものは削除されたり言い換えられたりしており、また、日本人視聴者にとってのわかりやすさを追求するために、字数制限があるにもかかわらず情報を補足したり、日本人視聴者に分かりやすい表現で言い換えたりしていた。

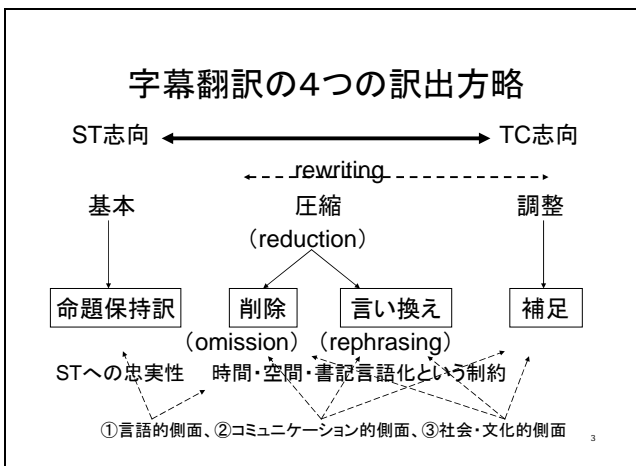
Díaz Cintas & Remael (2007) は字幕翻訳の翻訳学的特徴として、

- ① 起点テキスト、著者の概念が消失
- ② 書き換えとしての翻訳
- ③ 異種混交性
- ④ 時空間上の制約
- ⑤ 音声的起点テキストを圧縮した書記的形態

の5つを挙げている。①は主に映画字幕翻訳を想定してDíaz Cintas & Remaelが挙げているものであるが、英語ニュースの字幕翻訳においては、起点テキストも著者も明確なので、①については当てはまらない。しかし、②は「削除」「言い換え」「補足」のストラテジーを採用することで明らかに原文を「書き換え」ていると言えるので、当てはまる。また、③はフィードバック効果^{註8}によって、映像情報（もともと英語でのオリジナル）と字幕情報（日本語での文字情報）とが混交している記号の複合体として捉えられるので、認められると言える。そして、④⑤は字幕翻訳における決定的な「メディア上の制約」として、「削除」「言い換え」「補足」のストラテジーで多く見られる点である。

以上により、字幕翻訳という大きなメディア上の制約によって、時間・空間・書記言語化という制約の中で圧縮して書き換える翻訳的営み、というのがニュース字幕翻訳の特徴として浮かび上がり、その特徴を具現化したのが、「命題保持訳」に加えて、「削除」「言い換え」「補足」という訳出ストラテジーであると言える（図3参照）。

図3 ニュース字幕翻訳の4つの訳出方略

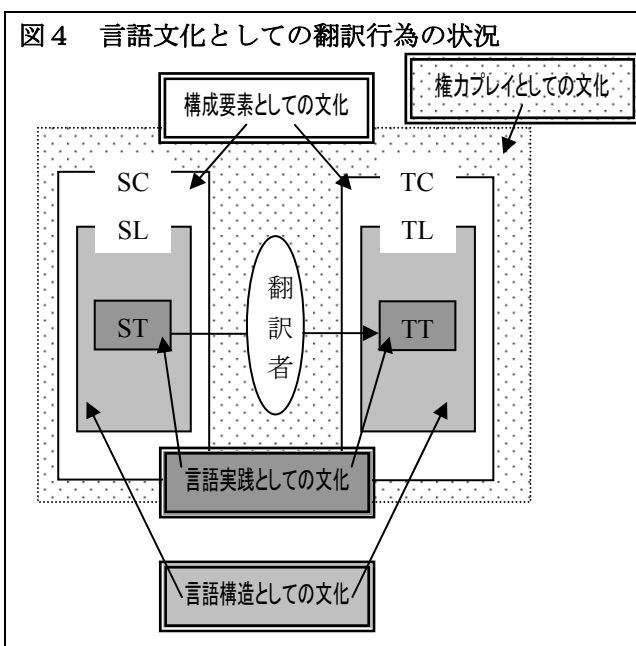


言語文化としての翻訳行為

では、これを「文化学」から捉えなおしてみよう。以下は2011年7月1~3日、沖縄・名桜大学で開催の「日本国際文化学会」年次大会での発表内容を加工したものである。

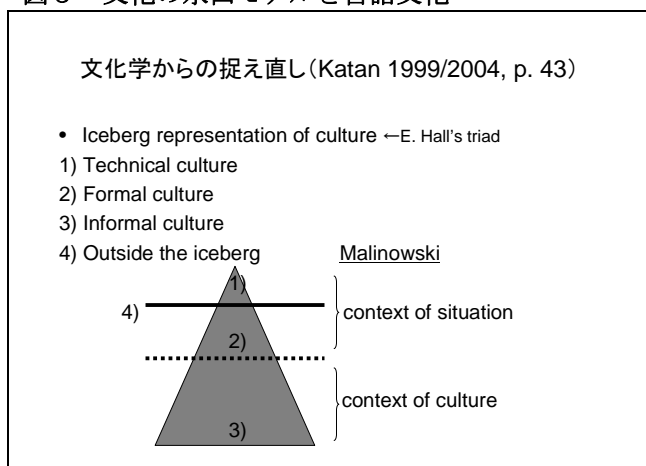
まず、文化は多義的・多面的な概念で、Kroeber & Klockhohn (1952) によると1952年の時点で文化の定義は165あったという。ここでは、平野健一郎の『国際文化論』（国際関係を文化の視点から見る学問）にしたがって、「文化とは、生きるための工夫（“designs for living”）」^{註9}である（平野 2000, p. 11）としたうえで、議論を進めることにする。

この定義を踏まえると、図2にあるように、起点側、目標側ともに、テキスト生成の側面（ST=TT）、言語的側面（SL=TL）、文化的側面（SC=TC）が同心円状に布置されており、これらはすべて文化と言える。改めて図を描くと、以下の図4になる。



エドワード・ホール の有名な「文化の氷山モデル」(Hall 1959/1990)によると、文化は(1)可視的なもの(海面より上)、(2)準・可視的なもの(海面付近)、(3)不可視なもの(海面下)があり、それぞれ、(1)技術的な文化(technical culture)、(2)公式的な文化(formal culture)、(3)非公式的な文化(informal culture)があると述べている^{註10}(Katan 2009, p. 78)。以下の(1)～(4)の説明は Katan (2009) に依拠しつつ、筆者の解釈を加えている。

図5 文化の氷山モデルと言語文化



(1) 技術的な文化 (technical culture)

これは、文化のうちの共有された百科事典的知識 (shared encyclopaedic knowledge) の次元で、制度、地理、芸術、食、服装、建築など、目に見える文化を総称するものである。翻訳学に落とし込むならば、‘culturemes’ (文化素) と言っているもので、各文化に特有の文化素を翻訳するために異文化の壁を乗り越えるべき訳出ストラテジーを翻訳学の研究者は多く考案してきたといえる。その一例が Kwiecieński (2001) で、① exoticising procedures、② rich explicatory procedures、③ recognized exoticism、④ assimilative procedures を提案している。これは異化 (foreignization) と馴化 (domestication) の連続体の地平に布置するならば、そのまま①-②-③-④と配列でき、①は命題保持訳が、②は言い換えが、③は命題保持訳が、④は削除ないし補足が訳出ストラテジーとして採られる、と考えられよう。この技術的な文化は、要するに即物的に物象化した文化の實在的側面と言える。これには文化用語 (culture-bound term) のほか、引喩 (allusion) なども含まれ、外部照応的 (exophoric) で当該コンテキストとの照応によらずば理解が困難で、かつ当該文化を離れた外国語にはそれに該当する訳語が見出せない場合に、

翻訳の最も困難な局面のひとつとして(無意識の次元は別として)一般的には捉えられる次元だと言えよう。図4で示した「構成要素としての文化」のなかで目に見える物象化された構成要素としての文化的事象に対し、目標言語でどのような訳語を当てるか、当てないならばどのような訳出方略で切り抜けるか、といった議論が中心となる。

(2) 公式的な文化 (formal culture)

これは機能性や適切性に関わる次元で、文化のあり方、実践の仕方では何が適切か、何が標準かを左右するストラテジー・能力の面であるといえる。慣習、伝統、行動・言説・芸術・服装などの方法・様式を規制するもの、と言える。翻訳学で言えば、スネル＝ホーンビーのいうドイツ語翻訳者が「標準」として捉えているもの、フェルメールのいう翻訳のスコポスに焦点を合わせた介入、などと言われるもので、目標文化で翻訳が受容されるために翻訳をいかに仕立てる (tailor) かに関わる局面だと言える (Katan 2009, p. 82)。

起点言語と目標言語の言語構造の差異が存在し (ソシュールのいうラングのレベル)、それを超克するための翻訳シフトという転換操作が必要になる (ソシュールのいうパロールのレベル^{註11}) ことは 101号、103号、106号などで具体的に論じてきたが、図1にある言語規範と翻訳規範の機制を基に、様々な訳出方略を駆使して特定のスコポスを目指して翻訳を実践するという構図がこの次元に相当すると言えよう。その意味で、ある種の「構造ないし構図としての言語文化」を構成する次元がこれに該当し、言語規範、翻訳規範、翻訳方略、スコポスなどはこの次元の射程にあると言えるだろう。図4で言えば、SL=TL に相当する局面である。

(3) 非公式的な文化 (informal culture)

これは意識下に存在する、意識に対して透明な価値観や信条、信念、アイデンティティ、役割に関わる目に見えない次元で、行動、思考、コミュニケーション、環境、時空、権力関係、主義、イデオロギーなどおよそ人間の営為の背後にあるものの総称である。ブルデューのいうハビトゥス (habitus)、つまり家庭、学校、メディアなどを通じて教え込まれた文化が現実の心的表象として相対的に固定されたものとなり、個人の現実世界における志向性を機制し制御するものがこれに相当するとも言える。これを民族誌学では「人の思考・感覚・発話・相互行為のやり方を形作る無意識の規則群」として「文化の文法」 (cultural grammar) と呼んでいる (Duranti 1997)。翻訳学に落とし込めば、「核となる第一義的な倫理的価値観」 (Chesterman 1997, p. 149)、

「アングロサクソン系米国人の価値体系に迎合した、異なるものの喪失と過剰馴化」(Venuti 1998)、「文化フィルター」の積極的な操作」(House 2006)などにも見られるものである。これは、前述の(2)で問題にした「標準」ないし「機能性・適切性」(からの逸脱)、つまり一般的な「構造ないし構図としての文化」を問題にするのではなく、個々の文化運用に関わる「実践としての言語文化」と言える。したがって、図4で言えば、個別の翻訳実践としてのST=TTのあり方、とくに、個々の翻訳者による個別の翻訳実践の結果物としての目標テキストにこれが反映していると捉えることができる。その意味で、(2)でのパロールとしての翻訳は構図としての言語文化であり、(3)で問題にしているのは、個々の言語実践の結果としてのパロール、一回的で個別具体的な、個々の翻訳者の持つイデオロギーの表出物としての局面を想定している。

ここまでを概括すると、(1)はSC=TC、(2)はSL=TL、(3)はST=TT、と位置づけているが、(1)(2)(3)の布置と図4の同心円はそれぞれの射程において、反転している。これは、文化を「生きるための工夫(“designs for living”)」と広義に捉えたうえで冰山モデルを想定し、それが翻訳実践でいかに現れるか、その行為状況を描いたものが図4である、という位置づけだからである。つまり、海面下には莫大な質量を備えた(2)(3)の次元が、翻訳行為の地平では反比例的に表面上現れるに過ぎない、ということの反映である。

(4) 冰山外の局面 (Outside the iceberg)

これは Katan (2009) がホールの冰山モデルに加えた部分であるが、翻訳における権力関係の次元のことである。ここでは、文化とは「社会構造が社会行為にかけた圧力の結果」として捉えられる (Jenks 1993, p. 25)。翻訳学で言えば、多元システム論 (Even-Zohar 1990/2004)、ポストコロニアル理論 (Bassnett & Trivedi 1999)、ナラティブ理論 (Baker 2006)、テキストのイデオロギー性 (Hatim & Mason 1997)、翻訳者の倫理的主体性 (Tymoczko 2003)、英語のグローバル覇権への抵抗 (Venuti 1998) などにも関わり、人類学の本質主義 vs. 構築主義などの論点とも関わってくるが、これに関しては論を改めたい。いずれにしても、前述の翻訳実践の「介入」性には、(1)(2)のレベルのみならず、(3)(4)のレベルにまで落とし込んだ上で議論が必要となってくるだろう (長沼 2010 が太田龍男の言説の解釈において、微妙に(4)を回避しているのは、実に巧みである)。

ニュース字幕翻訳の言語文化性

以上を踏まえて、ニュース字幕翻訳の実践行為のもつ文化性について論じたい。カタンは「文化フィルター (culture filter)」という概念を導入し、「まさに現実で成されていること(“what it is that is going on”)」に対する我々の知覚・解釈・評価を方向づけ、モデル化する概念として、文化を枠付け (framing) のシステムとして捉えている (Katan 2009)。

すべてのフィルターは同様にモデリングを通して機能する。モデルは通常、例えば「現実」のような複雑なことを単純化しその意味を理解するうえで役に立つ方法である。あらゆるモデルは Bandler and Grinder (1975) によれば、3つの原理から成り立っている。削除、歪曲、一般化である。人間がモデル化を行う場合、われわれは現実に行われていることすべてを知覚することはできない (削除)。またわれわれが目にするものを選択的に焦点化し、それを既知のものや目を引くものへと適合する傾向がある (歪曲)。そして細部は自分自身のモデルから埋め合わせをしたり、突出した差異をなだらかにしたりして (一般化)、結果として出てくる「世界の写像 (“map of the world”)」を有益なものにするのである。

(Katan 2009、翻訳は筆者による)

これは平野が提唱する「文化触変 (acculturation) 註¹²」の過程のモデル (平野 2000) における、①文化要素の呈示と選択、②統合、③結果、の3段階のうちの①における選択か拒絶・黙殺か、という過程と、②における言語的統合ないし調整の部分に大きく関わる。翻訳は言語をメディアにした営為である以上、そこには異文化間のフィルタリングがあり、かつ文化触変のプロセスの中で多次元において言語的操作を行い、社会的な介入行為を行うことが必然的に内包されている。そのなかで、継続的にニュースの字幕翻訳を実践する過程そのものが、ひとつの目標文化のなかのひとつの文化を構成し、かつ、他文化 (= 起点文化) の解釈・選択・評価行為として翻訳を実践するなかで、目標文化の文化触変を引き起こす。これはまさに、翻訳実践によって目標文化を再構築する営みに他ならない。と同時に、目標文化の側から起点文化を絶えず解釈し、選択し、評価する行為でもあるのが翻訳の営為であると言える。字幕翻訳自体、ひとつの文化を構成し、その文化を構成する営為が起点文化と目標文化を、目標文化の側からさらに構成するということが、本稿の結論であり、この文化の構成性には「介入」的要素が

色濃く反映されているが、その点については論を改めたい。

以上、本稿はニュース字幕翻訳という一般には不可視の情報コミュニケーションにおける翻訳文化を取り上げた。これはより「文化」問題が顕在化しやすい映画字幕翻訳や、翻訳一般にもある程度あてはまる議論だと筆者は考えている（但し、翻訳方略、スコポス、規範などの分析は、翻訳の種類によってきめ細かに分析してゆく必要がある）。

註

- 1) ST とは、Source Text (起点テキスト) のことである。以下、TT とは Target Text (目標テキスト)、C は Culture、L は Language を指す。
- 2) 長沼 (2010) では、foreignization と domestication を「異化」と「同化」としている (p. 299)。本稿では、後者は「馴化」と表記することで、この概念の「異化」効果を狙っているが、ここは長沼 (ibid.) の訳語で表記した。
- 3) NHK の BS-1 が放映する海外ニュースでは、放送通訳が施されるのがほとんどで、ボイスオーバーによる時差通訳の形態、つまり吹き替えに近い形態が利用されている。
- 4) この点、言語人類学を専門とする友人の浅井優一氏は、ギアツの視点を中心に、以下の様に述べている。(ギアツに関しては、拙著「文化翻訳論 I」『翻訳通信』107号を参照のこと。)

本質主義とは、「単純な」文化相対主義のことだと言えます。特定の言語や文化を共有した、明瞭な境界を持つ「閉じた」共同体の存在を前提とし、その共同体が持つ固有の文化的特徴を議論する類の視点です。つまり、エティック (etic) とイーミック (emic) の区別、テキストとコンテキストの明瞭な区別を前提としていると言えます。進化論的文化観へのアンチテーゼを孕んで展開した、20世紀初頭の人類学は、そうした文化相対主義の見方が顕著だったと言えます。(相対主義と反・相対主義が、類似してしまうという絡繰りもあるのですが、それについては、ここでは触れません。)

ギアツは、『文化の解釈学』の中で「バリのな」という言葉を使っているように、そうした文化相対主義的見解を強く持ち合わせています。「バリは、確かにバリのであり」、独自の文化的特徴を有しているという視点です。そして、そうした「バリのなもの」、「バリ文化なるもの」は、意識的にであれ無意識的にであれ、バリ人自身が彼らが日々参加する出来事に対して持っている、ある種の解釈モデルなのであり、それはバリでの日々の出来事・行為として体现されているもの、それを通して垣間見えるもの、解釈しうる意味、つまり「テキスト」である、とギアツは考えた。そのような、無数の出来事／テキストの連なり／重なりとして、より大きな(ある程度の相対的自立性を持つように見える)テキスト

が緩やかに形成される。それが「バリのなもの」であり、「バリ」というテキスト／文化であると捉えるのです。ギアツ流「解釈人類学」です。

従って、ギアツの視点の重要性は、具体的な出来事それ自体の解釈／分析、言い換えれば、文化／意味／テキストのコンテキスト依存性が結果として指摘された点にあると言えます。そして、ある意味では皮肉なことに、まさにその点が、それ以後「ギアツ批判」として展開してゆく、ポストモダン人類学と呼ばれるような転回への布石となったのです。つまり、ギアツの理論では、出来事／テキストを解釈する訳だが、そうしたテキストをテキストとして「明瞭な境界」を引くのはギアツ(研究者)自身ではないか、そのような出来事の場合／コンテキストに、ギアツ(研究者)自身も、研究者として参与してしまっているのではないか、どこからどこまでが「バリの」であり、どこからがそうではないのか、バリのテキストのコンテキストは、果てしなく広がっているのではないか、テキストとコンテキストを明瞭に区別すること自体が「イデオロギー」ではないか、などの疑問が呈されてゆくことになっわけです。こうした見方が、本質主義的文化観の批判(反・本質主義、単純な文化相対主義への批判)といって良いと思います。

しかし、ギアツは、彼の視点は、そうした単純な文化相対主義ではなく、「反・反相対主義」であると主張します。つまり、文化相対主義に反対するものに反対する、というスタンスを取ることによって、単純な文化相対主義や、人間の普遍的性質(本性)などに文化的相対性を還元することのない、相対主義的視点を可能にした。つまり、自らが拠り所とする文化相対主義自体を相対化する、内面的に批判できる視点です。上述したようなギアツ流「解釈人類学」は、出来事(テキスト／コンテキスト)の「厚い記述」によって、逆説的に、書き手の積極的な(主観的な)解釈が提示される、という二重のスタイルであり、まさに「反・反相対主義」を体现したものであると言えます。(その意味では、ポストモダン人類学的な「ギアツ批判」は、ギアツ自身にとっては「想定内」だった。つまり、取るに足らない「熱い」、「批判的」、その本質において「自己愛的な」、「ナルシシスティックな」もの、だったと言えます。)

このギアツの議論を翻訳学に応用した「厚い翻訳(thick translation)」という概念がある。「文化の厚い翻訳」に焦点を当てた議論を展開している佐藤=ロスベアグ・ナナ氏の説明を引用してみよう(佐藤 2011, p. 180)。

人類学者であるクリフォード・ギアーツは、ギルバート・ライルの語を借りて、未知の人びとの行動の裏にある文化的なコンテキストを理解できるように記す民族誌を「厚い記述/thick translation」(1987)と呼んだ。ギアーツの厚い記述から、近年のトランスレーション・スタディーズにおいては、Appiah Kwame Anthony が、他者を尊重しつつ、誠実な翻訳を通じて、翻訳される語の文化的背景を読者に理解させる手法として、「厚い翻訳/thick translation」(1993)を提唱し、さらに Hermans Theo が、アピアの論を援用しつつ、これまでの翻訳研究

のあり方を問いながら、文化横断的でより挑戦的な翻訳の可能性として、アピアの厚い翻訳の概念を展開させた (2003, 2007)。

以上のように、翻訳学と人類学は「文化」をどう扱うかにおいて、大きな接点があると言えるし、言語自体が文化を構成し、また翻訳実践自体が文化を構成しつつ再構成・再改編する営為である、と捉えることにより、文化学や国際文化学との接点も大いにあると言える。その意味で、翻訳学における言語理論と文化理論が対立し、後者が前者を周縁化しているという捉え方は、ひとつの学問分野の学説状況を対立競合ないし中心／周縁という眼差しで捉えているというイデオロギーが見え隠れしていると言わざるを得ない。

- 5) この点、義務的シフトと選択的シフトは元々、Vinay & Darbelnet (1958/1995) が提唱したものであるが、これに近時展開している認知言語類型論の研究を踏まえ、典型性の議論を盛り込んで再構成したのが河原 (2009, 2010a) である、という位置づけである。
- 6) Fillmore (1968) に基づいてセンテンスの構成要素を示すと、 $S = P + M / P = \text{Pred.} + \text{Arg.1} + \text{Arg.2} + \dots + \text{Arg.n}$ (S:文、P:命題、M:モダリティ、Pred.:述語、Arg.:項) となる (阿部 1995, p.162)。ここで「命題保持訳」としたのは、本来、モダリティまで含めた文 (sentence) の要素すべてを保持した訳出の意味であるが、「文保持訳」とネーミングすると「文」という用語の多義性に起因する誤解が生じるため、意図的にこの用語を案出した。
- 7) 微視的伝達 (micro-cosmic communication) とは、物語の世界内で登場人物がやり取りをする伝達のことである。他方、巨視的伝達 (macro-cosmic communication) とは、作者から観客へ向けられたコミュニケーションのことである (山口 2007, p. 22)。
- 8) 制約が多い字幕翻訳には非言語的要素を考慮する必要に迫られる。Nedergaard-Larsen (1993) は、映画字幕を分析し、字幕をつける際に視覚情報およびサウンドトラックのフィードバック効果を検討すべきだと論じている。つまり映像を見ただけで十分にメッセージが伝わる場合、その部分以外の情報を字幕にすることで制約に対応することが可能になるという。
- 9) 平野 (2000) によると、国際関係を見るのに必要な文化の捉えかたとして、クラックホーンの以下の定義を挙げる。

「文化とは、後天的・歴史的に形成された、外

面的および内面的な生活様式の体系であり、集団の全員または特定のメンバーにより共有されるものである。」

この定義のエッセンスである「外面的および内面的な生活様式の体系」の原文は、“a system of explicit and implicit designs for living”であり、さらに煮詰めれば“designs for living”、つまり「生きるための工夫」である、としている (平野 2000, pp. 10-11)。

- 10) エドワード・ホール (著)、国弘正雄・長井善見・斉藤美津子 (訳) 『沈黙のこぼれ』の訳語による。
 - 11) 丸山 (1983 pp. 111-112) によると、ソシュールの言う「パロール」「ラング」(そして「ランガージュ」) は次のとおりである。
 - ・ランガージュは、一つの潜勢、一つの能力に過ぎず、[...]個人ひとりでは決してラングに到達することはないだろう。ラングはすぐれて社会的なものである。いかなる事象も、その出発点はどうであれ、それが万人の事象となる瞬間までは言語的に存在しない (SM50(155)) *。
 - ・ラングとは、ランガージュ能力の行使を個人に可能にすべく社会が採り入れた、必要な契約の総体である。パロールとは、ラングという社会契約によって自らの能力を実現する個人の謂である。パロールのなかには、社会契約によって容認されたものの実現という概念が含まれている (SM50(160)) *。
- *ジュネーヴ大学教授ゴデルによる『一般言語学講義原資料』における断章番号。

language, Sprache

langage : コトバ、シンボル (抽象化・カテゴリー化・概念化) 能力

langue : 言語 (国語体) [コード] 社会制度 (条件)

speech, Rede

parole : 言葉 [メッセージ] 個人の言行為 (発話)

- 12) アカルチュレーション (acculturation) とは「異なる文化をもつ集団が、持続的な直接接触を行って、いずれか一方または両方の集団の元の文化の型に変化を発生させる現象」のことである (平野 2000, p. 55)。

参考文献

阿部純一 (1995) 「文の理解」大津由紀雄 (編) 『認知心理学 3 : 言語』東京大学出版会: 159-171 頁

- Baker, M. (1992/2011). *In other words*. London and New York: Routledge.
- (2006). *Translation and conflict: A narrative account*. London and New York: Routledge.
- Bandler, R. & Grindler, J. (1975). *The structure of magic I*. Palo Alto, CA: Science and Behavior Books.
- Bassnett, S. & Lefevere, A. (eds.). (1990). *Translation, history and culture*. London: Pinter Publishers.
- Bassnett, S. & Trivedi, H. (eds.). (1999). *Post-colonial translation: Theory and practice*. London and New York: Routledge.
- Catford, J.C. (1965). *A linguistic theory of translation*. Oxford: OUP.
- Chesterman, A. (1997). *Memes of translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Cronin, M. (2003). *Translating and globalization*. London and New York: Routledge.
- Díaz Cintas, J. & Remael, A. (2007). *Audiovisual translation: Subtitling*. Manchester/Kinderhook: St. Jerome Publishing.
- Duranti, A. (1997). *Cultural linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Even-Zohar, I. (1990/2004). Poetics today, special issue polysystem studies, 11(1), reprinted in L. Venuti (ed.). (2004). *The translation studies reader*, 2nd edition, London and New York: Routledge, pp. 199-204.
- Fillmore, C.J. (1968). The case for case. In E. Bach and R. T. Harms (Eds.). *Universals in linguistic theory*. Orlando, Florida: Holt, Rinehart and Winston.
- 藤濤文子 (2007) 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の諸相—』松籟社
- Gottlieb, H. (1992). Subtitling: A new university discipline, In Dollerup Caj et al. (Eds.) *Teaching translation and interpreting*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. 161-170.
- (1994). Subtitling: Diagonal translation, *Perspectives* 2.1:101-121.
- Hall, E. T. (1959/1990). *The silent language*. New York: Doubleday. [翻訳: 国弘正雄・長井善見・斉藤美津子 (訳) 『沈黙のことば』 (1966) 南雲堂]
- Hatim, B. & Mason, I. (1997). *Discourse and the translator*. London: Longman.
- 平野健一郎 (2000) 『国際文化論』東京大学出版会
- House, J. (2006). Text and context in translation, *Journal of pragmatics*. 38: 338-58.
- 稲生衣代・河原清志 (2010) 「英語ニュースの字幕翻訳ストラテジー」青山学院大学英文学会 (編) 『英文学思潮』第 83 卷 (pp. 31-55)
- Jenks, C. (1993). *Culture*. London and New York: Routledge.
- Katan, D. (1999/2004). *Translating cultures: An introduction for translator, interpreters and mediators*. Manchester: St. Jerome.
- (2009). Translation as intercultural communication. In J. Munday (ed.). *The Routledge companion to translation studies*. London and New York: Routledge, pp. 74-92.
- 河原清志 (2009) 「英日語双方向の訳出行為におけるシフトの分析—認知言語類型論からの試論」日本通訳翻訳学会・翻訳研究分科会 (編) 『翻訳研究への招待』第 3 号 (pp. 29-49)
- (2010a) 「翻訳とは何か—研究としての翻訳 (その 2)」山岡洋一『翻訳通信』101 号
- (2010b) 「概説書に見る翻訳学の基本論点と全体的体系」『翻訳研究への招待』第 5 号 (pp. 53-80)
- Kroeber, A. L. & Kluckhohn, C. (1952). *Cultures: A critical review of concepts and definitions*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Kwieciński, P. (2001). *Disturbing strangeness*. Toruń, Poland: Wydawnictwo EDYTOR.
- 丸山圭三郎 (1983) 『ソシユールを読む』岩波書店
- Munday, J. (ed.). (2007). *Translation as intervention*. London/New York: Continuum International Publishing Group.
- マンデイ, J. (著)・鳥飼玖美子 (監訳) (2009) 『翻訳学入門』みすず書房 [原著 Munday, J. (2008). *Introducing Translation Studies*. London and New York: Routledge.]
- 長沼美香子 (2010) 「太田龍男『スーパー・イムポーズにおける日本語の貧困』(1939年)」柳父章・水野的・長沼美香子 (編) 『日本の翻訳論—アンソロジーと解題』法政大学出版局: 292-303 頁
- Nedergaard-Larsen, B. (1993). Culture-bound problems in subtitling, *Perspectives: Studies in translatology*. 2. 207-242.
- Newmark, P. (1988). *A textbook of translation*. London: Prentice Hall.
- Nida, E. (1964). *Toward a science of translation*. Leiden: Brill.
- Pym, A., Shlesinger, M. & Jettmarová, Z. (eds.). (2006). *Sociocultural aspects of translating and interpreting*. Amsterdam and Philadelphia: Benjamins.
- Reiß, K. & Vermeer, H. J. (1984/1991). *Grundlegung einer allgemeinen Translationstheorie*, 2. Auflage, Tübingen: Niemeyer.
- 佐藤=ロスベアグ・ナナ (2011) 『文化を翻訳する—知里真志保のアイヌ神謡訳における創造』サッポロ堂書店
- 清水俊二 (著)、戸田奈津子・上野たま子 (編) (1992) 『映画字幕は翻訳ではない』早川書房
- Snell-Hornby, M. (2006). *The turns of translation studies: New paradigms or shifting viewpoints?*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- 戸田奈津子 (1997) 『字幕の中に人生』白水社
- Toury, G. (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam: John Benjamins.
- Tymoczko, M. (2003). Ideology and the position of the translator: in what sense is a translator “in between”? In M. Calzada Pérez (ed.). *Apropos of ideology: Translation studies on ideology—Ideologies in translation studies*. Manchester: St. Jerome, pp. 181-201.
- Venuti, L. (1998). *The scandals of translation: Towards an ethnic of difference*. London and New York: Routledge.
- Vinay, J.-P. & Darbelnet, J. (1958). *Stylistique comparée du français et de l'anglais*. Paris: Didier. translated and edited into English by Sager, J.C. & Hamel, M.J. (1995). *Comparative stylistics of French and English: A methodology for translation*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 山口治彦 (2007) 「役割語の個別性と普遍性—日英の対照を通して—」金水敏 (編) 『役割語研究の地平』くろしお出版: 9-25 頁

★動画配信における字幕翻訳の例

NY 1 ニュース (<http://www.mxvtv.co.jp/mxnews/ny1news/index.php?ym=201106>)

デモクラシー・ナウ (<http://democracynow.jp/video>)

チベット

前書き

筆者は先に、「東洋の翻訳論」シリーズの中で、東洋、特に近代以前の China、チベット、モンゴルにおける翻訳論を紹介し、検討を加えた。それに続くものとして、この翻訳通信の誌上をお借りして、東洋における翻訳者教育について述べてみたい。地域的には China、チベット、モンゴルとし、また、主に仏典翻訳を扱うこととする。まず全体的なことから述べるべきところであるが、準備の都合上、まずチベットを取り上げる。また、詳細な研究結果が手元にあるわけではないため、とりあえず 3 回 (予定) にわたって、現在までに知りえた事柄を書いてみたいと思っている。また、途中で関連事項を書きたいと思っているため、2, 3 回は中断するかもしれない。ただし、それらも関連記事であるため、より大きなテーマの一部と考えていただければ幸いである。

本論

一般に近代以前の東洋の翻訳者教育について書いた資料は決して多くないと思うが、チベットの翻訳者教育については、蒙古源流という歴史書の中に、興味深い記述があるので、ここで見てみたい。

蒙古源流は 1662 年、サガン・セチェンによってモンゴル語で書かれた歴史書である。「蒙古」の名を冠しているが、モンゴルだけではなく、インド、チベット、モンゴル、China の歴史を仏教的立場から記したものである。いわば東洋の歴史便覧のような書物である。その中から該当の箇所を引用するが、以下の引用は岡田英弘氏の訳⁽¹⁾によることとする。ただし、人名についての括弧内の説明はわたしの加えたものであり、また、「」内の「」は『』に改めた。改行の仕方も多少改めた。

それから、インドの言葉をチベット語に翻訳するために、チベットの子どもたちにインド語を教えたが、一人も子どもたちが覚えなかったとき、師 (パドマサンバヴァ) は心を大いに苦勞して、通訳できる子どもたちを探しに自分でお出でになり、国をめぐるって行き、一軒の家の外に至ると、父も母もおらず、一人の七歳の男の子がいた。そこでその子どもを見て、師は、

「すこしおそくなったので、今はここで昼飯を食おう」といって、そこに馬から下り、白い帳幕を建

てて坐って、その子どもを来させて、

「お前の父はどこに行ったのか」というと、

「言葉を探しに行きました」といった。

「お前の母はどこに行ったのか」というと、

「眼を探しに行きました」といった。

そこですこし待っていると、父は乳酒を買ってきた。子どもはこれを見て、

「私が、『父は言葉を探しに行った』といったのは、これを言ったのです。乳酒を飲めば、言葉を多く語ります」といった。

また母は灯の油を買って来た。そこで子どもは、

「『母は眼を探しに行った』といったのは、これを言ったのです。灯をつければ、暗い夜でもすべて見えます」といった。師は大いに喜んで、その子どもを直ちに連れていった。

それからもどって来て、王に仰せられた。

「この子は、昔のアーナンダの化身です。今は父はパゴル・ゲンドウンの息子で、パゴル・ヴァイローチャナといわれる者がこれなのです」といって、それにインドの言葉を教えれば、すらすらと理解した。それはチベットの賢者ヴァイローチャナ通訳官として有名になった。

それから・・・甲辰の年 (824 年) に、・・・チベットの賢者パゴル・ヴァイローチャナ通訳官、チヨクロ・ルイギエンツェン、バンデ・イエシエデ、カワ・ペルツェク、中国の和尚・・・らをして、経と真言の經典を残らず翻訳させて、・・・ (以下省略)

この話をそのまま史実として受け止めることはできないであろう。特に、子どもの言った言葉は、この人物が子どものころから優秀であったということを示すための創作であろうと思われる。しかしそれ以外の部分については、やはり大部分は史実を反映していると考えてよいであろう。また、子どもに質問 (面接) して、言葉に対するセンスがあるかどうか見ようとしたのも史実であろうと思われる。

なお、この記事はチベットに関するものであり、著者の時代よりもだいぶ前になるため、著者が他の史料から得たものを、自分の筆でまとめたものと思われる。そこで、もとの記事を探るべく、仏教的立場から書かれたチベットの歴史を調べてみる。源史料まで到達できれば幸いであるが、もしそれができない場合には、同じ源史料を利用して書かれたほか

の歴史書を調べてみるということになる。

ず調べるべきものはチベット年代記⁽²⁾であると思うが、そこにはこの記事はない。

次に、プトンのチベット仏教史があるが⁽³⁾、その中にもない。

第三に、1476～78年に書かれた青史と呼ばれる歴史書があるが、本原稿執筆までに調べられなかった。ただし、新情報はあまり期待できないのではないかとと思われる。

蒙古源流にあるこの記事から当時の翻訳者教育について知りうることをまとめると以下ようになる。

1. 希望者を翻訳者として訓練するのではなく、有望と思われる者をスカウトした。
2. 訓練は子どもの時（ここでは7歳とある）から始められた。
3. 本人や親の希望、意向は考慮されなかった。
4. 訓練を受けたものを出家させた。つまり、僧侶とした。サンスクリットを学び始めた時を出家の時と考えてよいのか、この資料だけからはわからない。
5. 実を結ばない者も多かった。

ここでまず問題となるのは、教育の効果があまりあがらなかったため、方法を変えたかどうかということであろう。しかし、最初の生徒たちも、ヴァイローチャナと同様、選ばれた子どもたちであったと思われる。本質的には、大きな変化はなかったのではないかと思う。

次に、ものになった翻訳者が少なかった（50人に1人か30人に1人かわからないが）ことは、肯定的にとらえられていたか、あるいは否定的にとらえられていたかということであるが、わたしとしては、肯定的にとらえられていたのではないかと思う。それは、ここで、ヴァイローチャナという人物の出現が、大きな出来事として語られているからである。

現実的に考えてみると、サンスクリットの教育は10年以上継続されたのではないかと思われる。7歳から始めて10年教えたとしても、まだ17歳であり、その年では責任ある仕事を始められるかどうかかわからない。途中でやめる生徒もあったと思われるが、残った者もあったため、上級になると1対1に近い授業が行われたと思われる。10年以上の教育となると、やはり相当の熱の入れようであるということになるであろう。

なお、インドとの交流は盛んであったため、教師の調達には問題はなかったものと思われる。

現在のわれわれから見て、7歳の時点で人選をす

るとするのは、あまりに早いように思われる。しかし、それは20歳未満を子どもとみなすわれわれ現代日本人の考えである。7歳ごろから開始するというのも、一つの可能な方法であったのかもしれない。実際、現代のわが国でも、小さいころから習い事を始める子どもは少なくない。

また、希望者を採るか、こちらから声をかける（スカウトする）かというのは、興味深い問題である。自ら希望する者であれば、熱意もあるであろうと考えるのであるが、最適任な人物を得るためには、こちらから、これはと思う人物に声をかけたほうよいという見方もあるであろう。

また、途中でドロップアウトする者があるという事情は、昔も今も変わることはない。教育の無駄を少なくする方策は常時考える必要があるであろう（ここでは、地位の高いパドマサンバヴァという人物が自ら適当な子ども探しに出かけ、また面接をしている）。

なお、チベットにおいて仏典翻訳が行われた期間は長期にわたるため、時によって状況は異なっているということも記しておきたい。

注

1. 岡田英弘訳注「蒙古源流」刀水書房、2004年、p. 51以下。
2. 稲葉正就、佐藤長共訳「フウラン・テプテル——チベット年代記」法蔵館、1964年
3. 佐藤長「古代チベット史研究 下巻」1977年の中に日本語訳が含まれている。

お知らせ

拙著「東洋の翻訳論」、「続 東洋の翻訳論」、「東洋の翻訳論Ⅲ」は下記の書店で扱っております（各冊とも税込価格 735 円）。

(株) 朋友書店

〒606-8311 京都市左京区吉田神楽岡町 8 番地

TEL : 075-761-1285 FAX : 075-761-8150

メールアドレス hoyu@hoyubook.co.jp

なお、本の内容は以下にあるとおりです。

<http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/ron/bn/toyo3.html>

バカだからうまくいく 12 の法則

翻訳の難しさと喜びを改めて実感

今回紹介するのは『バカだからうまくいく 12 の法則』という自己啓発書だ。実をいうと本書は私が翻訳したものである。先月の5日に出版されたばかりのできたてほやほやだ。自己啓発というジャンルの翻訳は初めてであったため、この本は私にとって思い入れの強い作品となった。翻訳作業では常に新しい発見と学びの連続で、非常に貴重な経験をさせてもらった。本書を出版する際にお世話になった編集者の方やエージェントの方には色々とお迷惑をおかけしたことをこの場を借りてお詫びしたい。自分が翻訳を手がけた本が出版される喜び、翻訳作業の難しさなど、全ての思いや経験を糧にして今後の活動に生かしていきたいと思う。

バカは人を喜ばすほめ言葉

『バカだからうまくいく 12 の法則』は、韓国のミリオンセラー作家、チャ・ドンヨブ神父が書いたバカの哲学である。これまで見向きもされなかった“バカ”に焦点を当て、バカになるといかに幸せな人生が送られるかを説いている。さらに著者によると、バカは個人レベルにとどまらず、国家レベルや世界レベルにおいても重要な役割を担っているという。なぜなら、目的追求の時代から目的発見の時代へと移行している今の世界では、“バカの常識破りな考え”が目的発見の救世主となるからだ。これまでの歴史の各シーンでは、老子やニュートンを始めとする過去の偉大なバカたちが大きな業績を残して人類の発展に寄与してきた。バカはその時は負け犬に見えても、後になって必ず勝ち組になるのだ。本書を読めば、かつては悪口としか感じられなかった「バカ」という言葉を、ほめ言葉として受け止められるはずだ。

著者が語るバカとはどんな人か

「バカ（韓国語：パボ）」と一言で言っても、そこにはさまざまな意味が含まれる。本気で憎い相手に「バカ！」と言う時もある、恋人同士が「バカだなあ／バカねえ」と愛情表現の一種として使う時もある。しかし通常は韓国でも日本でも「知能が劣っている」という否定的な意味合いでこの言葉を使

用することが多いだろう。本書が注目しているのは、バカの肯定的な面だ。バカの肯定的な面を持つ人とは、以下のようなタイプが挙げられる。

打算的でない人
発想が自由な人
同情心が人一倍、厚い人
犠牲的な人
純粹な人

世間は上記の人々を指してよくバカだと言う。しかし、同時に、このような人々は私たちが生きる社会において無くてはならない存在でもある。本書では、バカの肯定的な面を認識してもらい、それを取り入れて人生を豊かにしてもらうことを目指している。

妄想が奇跡を起こす

私が最も好きな部分は、「妄想を抱く」という2番目の法則だ。本文中で“妄想”は“現実の壁を認識できない自信」と定義されている。この定義は著者自身が作ったものだが、著者は普段から機会があるたびにこう大口を叩いているという。「うまくいくかどうか、見ていてくださいよ」「私は絶対にできるんです！」著者が『虹の原理』という処女作を執筆した時もそうだった。周りからの「無謀だ」という否定的な声をよそに、著者は『虹の原理』がミリオンセラーになることを妄想した。そして、その妄想は現実となった。この点には非常に共感できる。過去を振り返ると、妄想（夢）が現実になったことが私にも何度かあった。ただの偶然ではなく、きっと自分が信じ続けたから叶ったのだな、という出来事だ。その効果を確信してからは、自分の抱く妄想や願いが「無謀で実現不可能なもの」だと決して思わなくなった。そして今後の人生にも希望がもて、自分は必ず満足のいく人生を送ることができる、という自信も持つことができるようになった。時々、弱気になってしまうこともあるが、そんなときはこの章を読み返したいと思う。

題名：バカだからうまくいく 12 の法則
原題：바보 Zone (パボゾーン)
ページ数：254 ページ
著者：チャ・ドンヨブ
訳者：福田知美
出版社名：サンマーク出版
発行：2011 年 7 月 5 日
著者紹介：ミリオンセラー作家にしてカリスマ神父。5ヶ国語に翻訳されたミリオンセラー『虹の原理』をはじめ、『幸福宣言』など著書多数。本書も韓国でベストセラーとなる。著書を通じて成功と幸福を呼ぶ原理と人生の真の知恵を伝えている。(本文より抜粋)

目次

プロローグ

バカにされないよう必死に生きてきた
「バカ」がほめ言葉になる時代
リーダーはバカでなければならない
バカゾーンに人類が求めるものがある
愚か者には奇跡が起こる
お荷物が時代の救世主になるとき
バカの強みはどこにある？

第一章 大きな知恵はバカのようにみえる

1. 昔からバカはすごかった
2. 一点集中のバカ
3. バカの反撃

第二章 バカだからうまくいく 12 の法則

1. あなたもバカねえ
2. バカだからうまくいく 12 の法則
 - ① 常識を疑う
 - ② 妄想を抱く
 - ③ すぐに実行する
 - ④ 小さいものを大きく感じる
 - ⑤ 大きいものを小さく感じる
 - ⑥ 狂ったように熱中する
 - ⑦ 他人の視線を気にしない
 - ⑧ 牛の歩みで進む
 - ⑨ 誠実でいる
 - ⑩ 透明でいる
 - ⑪ 惜しみなく分け合う
 - ⑫ いつも笑っている

第三章 自由なバカになろう

1. 境界のない想像力
2. 思考を豊かにするもの
3. 時間など存在しない

エピローグ



韓国の本のリーディング、および翻訳のご依頼はこちらまでご連絡ください。

福田 知美

[fukuda.tomomi アット gmail.com](mailto:fukuda.tomomi@gmail.com)

「アット」を@に変更してください